

II 特別連載 II

科学技術  
振興機構 『さくらサイエンスプログラム』友情と感激

第289回

新型コロナウイルスの感染拡大の影響による海外からの渡航制限のため、さくらサイエンスプログラムでも招へいが実施できない状況が続いている。科学技術振興機構(JST)では、これまでの交流により醸成された海外の送出し機関と日本の受入れ機関の良好な関係を継続させるため、また新たな交流に向けた準備のために、各機関によるオンラインプログラムへの支援を続けている。今回は名城大学と東北大学が実施したプログラムについて紹介する。

## 名城大学の活動報告



丸山 隆浩  
(名城大学理工学部  
応用化学科教授)

### 上海大学とのオンライン交流

科学技術振興機構(JST)の国際青少年サイエンス交流事業「さくらサイエンスプログラム」の支援を受けて、2021年12月11日午後、名城大学と上海大学の両大学間の交流プログラムを開催した。本プログラムは、元々20年2月に、上海大学の教員・学生を名城大学天白キャンパスに招へいして実施する予定であったが、新型コロナウイルスの感染が拡大したため延期となり、20年度中に開催することができなかった。21年も、依然としてコロナ禍による海外からの外国人の新規入国制限が続いている状況であったため、



上海大学の紹介

オンラインで両大学間の交流セミナーを開催することとなった。中国とのオンライン交流は初めてということもあり、事前に両大学の実施責任者の丸山隆浩・名城大学教授と Zhen-Yan Deng



交流プログラム実施中の名城大学生

上海大学教授との間で打ち合わせを行った。中国国内では中国製のウェブ会議システム以外は接続が不安定となりやすいため、打ち合わせには Tencent 社が提供している「Zoom Meeting」を用いた。名城大学側参加者のパソコンに同ソフトをインストールし、事前にウェブ会議開催のための接続確認を行った。また、本交流で行う発表内容に関して、前もって学内の安全保障管理の審査を受けて承認を受けた上で実施した。

当日は日本時間14時にセミナーを開始した。セミナーは前半に両大学の概要紹介を、後半ではサイエンスティフィック・セッションと題して両大学の研究内容の紹介を行った。前半では、両大学の実施担当責任者である、名城大学の丸山隆浩教授と上海大学の Zhen-Yan Deng 教授が、お互いの大学の概要について紹介。名城大学は、中部地方有数の規模を誇る私立大学であること、ノーベル賞受賞者を2名輩出していることなどが、丸山教授から紹介された。また、上海大学についても、非常に多数の教授陣をかかえ、世界の大学ランキングでも上位にある高い水準の大学であることが Deng 教授より紹介された。

後半では、両大学から3名ずつ、交互に発表を行った。上海大学側からは、主に物理学科の教員による研究紹介が行われ、Zhen-Yan Deng 教授、Lei-Mei Sheng 准教授、Yi

「D」教授がAIの表面処理技術や、カーボンナノチューブの作製法と応用、金属表面での炭化水素の分解の理論的研究についての発表を行った。

名城大学側からは、ナノマテリアル研究中心と理工学研究科応用化学専攻の大学院生による発表が行われ、Kanai Prasad Sharmaナノマテリアル研究センター研究員、理工学研究科応用化学専攻の修士2年生の近

## 東北大学の活動報告



五十子 幸樹  
(東北大学  
災害科学国際研究所教授)

## 中国・四川大学との 震災復興に関する交流会

2021年12月18日、東北大学災害科学国際研究所と四川大学災後重建・管理学院は、科学技術振興機構のさくらサイエンスプログラムの支援により交流会を実施しました。四川大学災後重建・管理学院は2008年の四川大地震について、また、東北大学災害科学国際研究所は2011年の東日本大震災を受けて震災復興に貢献することを目的の1つとして設立された研究機関であり、活動目標等に共通するところが少なくありません。実際、これまでも両研究機関の研究者同士が交流してきました。残念ながら今回の交流会は、新型コロナウイルス感染症拡大のため、四川大学側参加者の来日が叶わず、オンラインでの実施となりました。

交流会では冒頭、四川大学災後重建・管理



四川大学災後重建・管理学院のGretchen Kalonji所長



災後重建・管理学院のBaofeng Di教授  
で根本から緻密に考える態度が身についたことである」との回答がありました。

閉会の前に、オンラインで集合写真を撮り、四川大学災後重建・管理学院のProfessors Di教授から閉会挨拶を頂きました。来年度以降新型コロナウイルス感染症拡大が収束した暁には対面での交流を行うこと、今後さらに東北大学災害科学国際研究所と四川大学災後重建・管理学院の連携を強化することを約束して閉会となりました。

末筆となりましたが、本交流会の機会を与えて下さったJSTに深く感謝申し上げます。

藤秀氏、同修士1年生の柄澤周作氏が、グラフエンやカーボンナノチューブなどナノ材料に関する研究発表を行った。オンラインではあったが、両大学から教員・学生を含め、33名の参加者があり、活発な質疑が行われた。セミナーの最後の挨拶では、丸山教授とDeng教授の間で今後両大学間で交流を続けていくことが確認された。

学院のGretchen Kalonji所長と実施担当者である東北大学災害科学国際研究所所長補佐の五十子幸樹教授からの挨拶があり、続いて東北大学が位置する仙台市、東北大学青葉山キャンパスの紹介がありました。続いて、21年9月末に開催された、第17回世界地震工学会議の関連イベントである市民公開講座向けに米国ノートルダム大学(Tracy Kiewit Center)准教授が寄せて下さったビデオ講義を皆で視聴しました。この講義では、ハイチ、ネパール、メキシコにおける震災復興において防災・減災に携わる研究者が出来ることについてケーススタディに基づく考察が紹介され、防災・減災と災害復興を専門とする参加学生は今回多くを学んだようです。

災害科学国際研究所で日本学術振興会外国人特別研究員として研究活動を行っている郭雪媛博士からは、日本学術振興会の研究支援や日本で研究活動を行うことの魅力について紹介がありました。また、東北大学工学研究科博士後期課程で学ぶ王勃雄氏からは、博士課程での研究活動とそれを支援する奨学金について説明がありました。中国国家留学基金管理委員会の奨学金や、日本政府(文部科学省)奨学生制度、日本学術振興会の特別研究員制度に加えて、東北大学国際共同大学院プログラムなど博士を目指す学生には多様な支援制度があることが紹介されました。

参加学生から、日本での研究や学習で最も意義深いことは何かという質問があり、郭博士から「常に物事の本質に立ち返って、自分